

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成 28 年 6 月 10 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程1年

氏 名 岡久 太郎

助 成 の 種 類	平成 28 年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	The 8th Conference on Language, Discourse and Cognition (第八回言語・談話・認知国際学会)		
発 表 題 目	Misunderstandings as negative evidence: Considerations on multimodal aspects in discourse (否定的証拠としての誤解: 談話におけるマルチモーダルな側面に関する考察)		
開 催 場 所	国立台湾大学		
渡 航 期 間	平成 28 年 5 月 13 日 ~ 平成 28 年 5 月 14 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会 計 報 告	交 付 を 受 け た 助 成 金 額	100,000円	
	使 用 し た 助 成 金 額	100,000円	
	返 納 す べ き 助 成 金 額	0円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空費(旅券代込み)	40,000円
		交通費(電車代・バス代)	6,000円
学会関連費(資料作成費込み)		30,000円	
宿泊費		24,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 学会直前の採用決定だったため、郵送よりも先に電話連絡をして頂けたおかげで、渡航前に助成を受けることが出来ました。誠にありがとうございます。		

成果報告書および成果の概要は、財団に郵送(あるいは持参)するとともに、Excel・Wordファイルでメール送信して下さい。メール送信分の印鑑は不要です。

## 成果の概要 / 岡久 太郎

### 会議の概要

今回、私が参加したのは2016年5月13日から14日にかけて、台湾の国立台湾大学で開催されたThe 8th Conference on Language, Discourse, and Cognition（第8回言語・談話・認知国際会議）である。この国際学会は台湾言語学会と国立台湾大学の共催により、2007年より（2012年までは毎年行われ、それ以降は隔年）行われているもので、毎回アジアだけでなく、欧米からの参加者も多数集めている。今回は、一般テーマとして「認知言語学と学際的研究」、特別テーマとして「言語多様性と認知」が設定された。これらのテーマからも分かるように、参加者は理論言語学を専門とする研究者だけではなく、心理学、認知科学、フィールド言語学等を専門としている様々な分野の研究者が集った。

### 成果報告

私は、上記の国際学会において、「Misunderstandings as Negative Evidence: Considerations on Multimodal Aspects in Discourse」（否定的証拠としての誤解：談話におけるマルチモーダルな側面に関する考察）と題して口頭発表を行った。これは、これまで実際の談話（会話）データの観察において見逃されていた非言語的な側面を誤解のデータを利用することでより精緻に分析することが可能となることを示した方法論的研究であると言える。我々は日常の会話において、言語的音声情報だけでなく、非言語的音声情報、視覚情報、嗅覚情報といった様々なインプットを組み合わせることによって、他者の発言を理解している。しかし、円滑に進行している談話を観察すると、聞き手が話し手の発話をどこまで聞いているのか、話し手のジェスチャーをどこまで見ているのか、話し手の行為以外の文脈的情報をどこまで参照しているのかを特定することは非常に難しい。そこで、私は誤解という現象に着目した。誤解は、話し手の意図と聞き手の理解がずれていることが、談話参与者自身によって発見された現象であるが、理解のずれの多くは言語的情報をただ単に聞き間違えたために生じたものではなく、それ以外の文脈的情報のどこに着目すべきかが話し手と聞き手の間で異なっていたために生じたものであると言える。このため、誤解のデータを詳細に分析することで、実際の談話の中で話し手と聞き手のそれぞれが着目している非言語的な文脈情報を発見することが可能となる。具体的に私が着目した誤解の事例は、(1) 電話会話において発話中に突然笑ってしまったことにより、発話全体の意図が“現状の報告”として誤解された事例、(2) 話題として導入された語が、対話者には話題として捉えられなかったため、

指示語の指示対象が誤解された事例、(3) あるテレビ番組に関する話において、聞き手が「テレビ番組についての慣習的な知識」に基づいて発話を理解したため、省略された主語を誤って解釈した事例の3つである。これら3つの事例は、(1) はこれまでのマルチモーダル分析においても着目されてきた種のものであるが、(2, 3) は今までのマルチモーダル分析ではあまり着目されてこなかった種のものであると言える。すなわち、(1) は「笑い」という非言語的音声情報によって生じた誤解であるが、(2, 3) は「話題」という発話時にリアルタイムで蓄積されている記憶や「慣習的な知識」という我々がこれまでの経験から抽象化して得た記憶によって生じたものであり、前者が外部からのインプットであるのに対し、後者は記憶という内部からのインプットとなっている。誤解分析の意義は、通常の映像・音声データの観察からは難しい上記のような人間の脳内にあるコミュニケーション資源を明らかにする点であると言える。

口頭発表における質疑応答では、3名の方からご意見、ご質問を頂いた。1点目はタイトルにある「否定的証拠」の意味についてである。言語学では、「否定的証拠」を「言語習得において、ある文が非文法的であることを示すもの」（「その言い方は間違っているよ」といったメタ言語的発話など）を意味する。私は、この定義をより一般化させ、「ある発話が話し手の意図通り理解されないものであることを示すもの」という意味で用いていたため、この質問によってこの点をより明確化することができた。2点目の指摘は、(2)の事例は「話題」として出された語がピッチ等の変化といった非言語的手段によって示されているのではないかというものであった。この指摘は、発表前には考慮していなかった点であったため、今後の研究にはぜひとも反映させたいものであった。最後の指摘は、(2) と (3) に関与している記憶の差異についてである。発表時は便宜的に会話に登場した内容に関する記憶を「短期記憶」、会話に登場していない内容に関する記憶を「長期記憶」と呼び、二者を区別していた。これは、本来の認知科学的定義と少しずれた用法であるため、質疑応答においてはその旨を説明したが、今後の研究においては術語の使用に細心の注意を払う必要があるだろう。

また、上述の国際学会に参加して気づいたことは、現在は認知言語学における研究の方向性の転換期にあるということである。2000年代よりも前の認知言語学的研究は実際のデータをもとに我々がどのような認知的処理を行い、言語を産出・理解しているかという仮説を構築する研究が多かった。しかし、今回の国際学会で行われていた発表は、既に提案されている仮説を新たなデータや心理学的実験によって検証するという方向性の研究が大半であった。日本国内では、いまだに仮説を構築する方向性の研究が多いが、今回の国際学会に参加したことで、認知言語学の最前線を肌で感じる事ができた。

さらに、国立台湾大学の江文瑜先生や呂佳蓉先生、国立台湾大学語言研究所に所属する院生との交流も深めることできた。

## **謝辞**

上述のような成果を得るためには、貴財団からの援助が不可欠でした。採用決定が学会開催の直前であったにも関わらず、迅速な手続きをしてくださり、渡航日よりも前に助成を受けることができたのは非常に助かりました。今回得た成果を博士論文の執筆を始めとした今後の研究成果にぜひとも生かしていく所存です。心より感謝申し上げます。